


健康登山55: 自然歩道28 (紫香楽宮跡 ~ 岩尾山 ~ 上磯尾)

コース	貴生川駅 紫香楽宮跡駅 1.9km/45 隼人橋 3.8km/68 新田 2.2km/34 大沢池 1.4km/29 息障寺 0.6m/25 岩尾山 0.7/19 息障寺 1.3km/23 大沢池 自然歩道合流点 0.7km/22 峠展望台 2.6km/43 上磯尾バス停 甲南駅		
水平距離	15.2km	断面図 縦軸: 高度m 横軸: 距離km	
水平換算距離	15.4km		
累計高低差	登り683m、下り755m		
標準歩行時間	5:08		
実績歩行時間	5:09		



山行報告

山行日 2010・6・3(木) 天候 晴 午後 雷雨 参加者 8名

行動 京都駅8:37 貴生川駅9:33 紫香楽宮跡駅10:00 隼人橋10:50 新田11:58 大沢池 12:18~13:01 息障寺13:38 展望台13:55 岩尾山14:07 合流点15:05 峠展望台 15:25 上磯尾バス停16:09 甲南駅17:07 京都駅着18:06

記録

貴生川駅から信楽高原鉄道で紫香楽宮跡駅へ向った。昨年7月に訪れた時は石山駅から帝産バスに乗ったが減便されて現在は利用できない。

駅からすぐに100mの昇降があり峠からは信楽方面が見下ろせた。一旦、新名神下の隼人川まで下り穴太衆積みの石垣で整備された遊歩道を東進、隼人橋からつめた林道を登るのだが地道で木陰もあり気持ちよく歩けた。舗装路に出て30分ほど歩くと新田集落のバス停に着いた。田植えの済まされた田圃には『環境こだわり農産物栽培圃場』の立て札があった。署名もされていてびわ湖の水質保全に努力されている様子がよくわかった。

この後岩尾池、大沢池と続き自然歩道は東側を通るが私達は岩尾山に登るために西側を歩き、大沢池北端のキャンプ場で昼食をした。

昼食後、岩尾の一本杉に立ち寄り、息障寺までは車道を登り、釣鐘堂横の石段から山頂に向った。途中にある岩場が展望台になっている、ここで集合写真を撮った。息障寺の裏山には多くの石仏があり四国八十八ヶ所の巡礼道とのこと。その途中から山頂を往復した、山頂には二等三角点があるが展望は乏しい。この山頂往復だけが山道らしい道だった。また山頂周辺は松茸山でシーズン中は立入りが禁止されている。

この頃から雷雨となったが傘で対応できる程度だった。大沢池南端から東側に回りこみ、北上して東海自然歩道と合流した。ここから100mほど登った峠が展望台になっている。

甲賀の里はよく見えたが、鈴鹿の山は霞んで確認できなかった。

昭和池を経て、田圃地帯になると上磯尾の集落は近い。上磯尾バス停着16:09分。

バス待ちの30分間で着替えをし、穏やかで静かな時間が流れる山里の良さを味わった。

コミュニティバスには小学生が3人乗っていた。このバスは土、日は運休、要注意。

自然歩道（湖南 紫香楽宮跡～岩尾山～上磯尾）



①紫香楽宮跡駅
駅前案内板
10:00



②峠から信楽方面
10:15



③新名神下の
隼人川横を歩く
10:41



④岩尾の一本杉
13:07



⑤息障寺の分岐
案内板
13:24



⑥岩尾山展望台
13:55



⑦岩尾山の
二等三角点
14:13



⑧石仏が並ぶ
岩尾山周回道
14:30



⑨峠展望台から
鈴鹿方面
15:25



⑩上磯尾集落
バス停周辺
16:08

名所・旧跡ミニガイド（自然歩道：紫香楽宮跡～岩尾山～上磯尾）

参考資料 ホームページ他より

紫香楽宮跡：聖武天皇は天平 12 年(740)「**藤原弘嗣の乱**」で鎮圧の報告が届かないうちに、平城京を飛び出し、伊賀、伊勢、美濃、恭仁京、難波、を流浪。恭仁恭に遷都。天平 14 年 8 月 11 日(742)紫香楽宮建設を開始。翌年 10 月 15 日大仏造立の詔を出す。紫香楽での大仏造立は聖武天皇の悲願であったが、反対も多く、山火事の頻発(放火とも)や地震などで断念、平城宮を出て 5 年後、元の平城宮に還られた。(2010 年 4 月 NHK 古代史スペシャルドラマ波乱万丈『大仏開眼』)

現在の紫香楽宮跡は大仏の体骨柱を立てた「甲賀寺跡」で、本来の宮跡は北隣の「宮町遺跡」と発表されたが、発掘中の為まだ指定はされていない。

隼人橋：隼人族に因む名称の橋。隼人川に架かる。(紫香楽宮時代に関連か?)

「壬申の乱」後、南蛮人である「隼人国家」が天武朝に朝貢する。

隼人族は大和朝廷に反抗したときもあるが、やがて朝廷にとって重要な協力者になった。7 世紀後半に強制的に大量の移住を受け入れ、山背国大住(京田辺市)には 6 世紀前半頃に居住があり、その中心地といわれる。8 世紀には朝廷に服属し[隼人]と呼ばれ、朝廷を守護した。平城宮から隼人橋が発掘されている。

神話では、**海幸彦(兄)**が**山幸彦(弟)**に服従、**隼人族の祖**となったと伝わる。

「**藤原弘嗣の乱**」740 年では、在京の(紫香楽?)隼人を集め 24 名に官位、官服を与え、九州に使わせ、弘嗣軍に付いた隼人の宣撫工作を行わせて、弘嗣軍に付いていた隼人の戦線離脱に成功して弱体、「弘嗣の乱」は 2 ヶ月で収束した。

つめた林道：つめた川(谷)に沿った林道。東海自然歩道のルートになっている。

「つめた川」は杉谷川の支流。杉谷川の起点は「岩尾山」の北東麓。

杉谷川は、「油日岳」に発した杣川の支流。杣川は野洲川最大の支流です。

岩尾池：明治年間に造られた溜め池。杉谷川上流の長瀬川をせき止めるようにして造られた。改修など行われ現在の姿になる。堤高 8.5m 総貯水量 300,300 m³ 池の沿岸にキャンプ施設と農地、入水は上流の溜め池と山林からの 2 系統あるが、山林からの流入水のほうが多く、良好な水質となっている。滋賀県指定の天然記念物『**岩尾の 1 本杉**』が水際に生育している。樹齢 1000 年以上、幹回り 4.7m。『伝教大師最澄』がこの地で食事後、箸を地面に突き刺したものが、芽生えたもの、という伝説がある。

息障寺(岩尾不動)：池原延暦寺ともいわれ天台宗に属する。平安時代初期、建材を求めてこの地に来た『伝教大師最澄』の開基(延暦2年783)と伝える。

本堂は岩尾山の中腹にあり、山中いたるところに巨岩があり、山岳仏教の聖地として栄えた。奥の院不動岩に室町時代初期の線刻の磨崖不動明王坐高5mがあり、『岩尾の不動』といわれている。

(伊賀では横山側に息障寺が近接しており「横山の不動」と呼ばれている)

他に南北朝期の至徳2年(1385)銘のある「磨崖地藏菩薩坐像」もある。

息障寺黒門参道入口に、芭蕉の句碑『行春を 淡海の人と をしみけり』がある。(句碑は苔むして判読は難しい)

岩尾山 : 標高 471.1m二等三角点。点名；杉谷村

滋賀県と伊賀の県境に位置し、全山いたるところ巨岩が露出し、山全体が、山伏、修験者の修行の場となっていた。中腹に伝教大師開創と伝える岩尾山息障寺がある。

甲賀忍者の修連場としても知られ、本堂近くに、曼荼羅岩、行者岩、八丈岩、稜線近くに、お馬岩、扇岩、木魚岩、屏風岩(磨崖仏)など巨岩、奇岩がある。山頂から展望は正面に、飯道山、左に竜王山、右は庚申山。遠く霞んで鈴鹿の霊仙山、振り返ると、樹木の間から南鈴鹿の油日岳、那須ヶ山、なだらかな霊山が見える。

2010年4月現在、滋賀県観光情報HPに「360度大パノラマあり」とある。

磯尾/竜法師(集落)：岩尾山の北山麓は甲賀、南山麓は伊賀の横山。

杣川流域一帯は鬱蒼とした大美林が広がっていて、良質の木材を産出する地域で、東大寺など巨大建築用材を産出する公の杣山(荘園)であった。杣川は矢川、油日川、ともいわれ杣川に架かる矢川橋辺りに矢川津という川津が設けられ役所の出先機関が開かれていたという。

甲南町杉谷は文字通り杉を産出していた。主業は杣(公の樵/杣人)で建材を杣川の矢川津へ切り出していた。

杣人は、副業に伐採道具の鍛冶、採薬、採石、火(火薬)の扱いに長じ、薬は数多くの秘薬を発明、やがて、伊勢朝熊妙法院の祈禱札を持って、熊野信仰を広めた際「朝熊万金丹」などの薬を配布し、全国の情報を集めた。

甲賀、伊賀は「古びわ湖層群」があり、土質が農業に向かず、特殊技能が発達し、忍びの術に連なった要因の一つでもあると考えられている。

(古びわ湖は大山田湖、甲賀湖などと変化し次第に北上して現在に至る)

山岳宗教が栄えると「磯尾、竜法師」地区は、飯道山、岩尾山などの山伏、修験者が定住する山中の隠れ集落となり、ひっそりと生活していたが、山賊

や小武士団の抗争に対して、惣(共同組織)が形成、生活を守る自衛の手段として生産や生活の特殊技術も向上(忍の術)が発達する。後に忍者と呼ばれた。「竜法師集落」に惣奉行の一人であった望月出雲守旧居の甲賀忍術屋敷(公開)があり、下磯尾集落には非公開の第二の忍術屋敷(中山家東雲舎)がある。

【望月家】平安時代「平将門の乱」で軍功のあった諏訪氏の三男、望月三郎兼家が信濃から甲賀郡司となり、1480年望月城を築城し、近江守護職、佐々木六角氏の配下として、甲南地方の大部分を支配するように成長した。甲賀、伊賀の大半は荘園で木材の供給地あったが、戦国時代に荘園没落などで落ちぶれた武士が集まり惣(共同組織)ができる。望月家は甲賀五十三家の代表となる。

活躍したのは、長享元年(1487)足利義尚が六角高頼を討とうとした折、夜襲や、様々なゲリラ戦で苦しませ、3年にわたった戦いは、義尚の陣中死(1489)で終結した。この戦いの印象は、全国に知らせる事になった。戦いに参加した郷士を甲賀五十三家と呼ばれる。

【磯尾】「磯の尾」、ここから海(湖)と陸の境界が始まり、磯尾の地名起源となる？磯(池/湖/淡海)に棲む「竜の尾」とも解釈されている。
〔地形(地図)上の磯尾川も尻尾のようなうねりに見える〕

【竜法師集落】旧名は竜池村(たついけむら)といったらしい。

竜の法師：甲賀に不思議な術を使う竜巻法師が居た、望月改め甲賀三郎兼家の子「家近」が、その術を習い甲賀流を興す。子孫は、甲賀、望月、鶴飼、内貴、芥川の五姓家となり、甲賀家は二代目で天竜甲賀、地竜甲賀、荒波甲賀の三家に分かれた。他に竜の名つく家もあったらしい。
更に南北朝のころ五十三家に分かれた。

【嶺南寺】神亀2年(725)良弁の開基。延暦年間に天台宗に転じた。

望月家の菩提寺。

木像地藏菩薩坐像は国重文

【甲賀流】数多くの秘薬を発明、火薬の技実も進んでいた。城数も100超を有した。

著名甲賀忍者に猿飛佐助。モデルは伊賀下忍の上月佐助こうずきともいわれる。
元陸軍中野学校は甲賀流の系譜を引くという。

【望月城】JR甲南駅南西2km新名神の手前、杉谷川を挟んで両サイドに伸びた尾根の末端標高200m地点。杉谷川の南に望月城。100m離れて「望月城支城」、正福寺から100m離れて「杉谷砦」(望月支城から300m)がある。杉谷川の北に「杉谷城」があり、望月城から200mの距離である。それぞれ土塁が残る。

惣中を造り甲賀共和国性を取り、高台や交通の要所に城を数多く造り、連絡を取り合って安全を確保していたという。(甲南だけで19の城を数える)

【杉谷善住坊】甲賀五十三家の杉谷氏の一族、鍛冶職で**甲賀一の鉄砲の名手**。

「信長を狙撃した男」として名を残す。(南原幹雄著、信長を撃^{はじ}いた男)

北陸攻めの信長は、浅井氏から逃れ、京都から岐阜城に帰還する途中、近江の「千草街道」を選んだ。善住坊は峠手前の岩陰に潜み、20mの至近から火縄銃で2発撃ったが、信長の小袖をかすめ失敗した。外れた原因は謎。

後に『信長は天に守られている』といわれた。

善住坊は、近江高島に身を潜めたが見つけれ、首から下を地面に埋められ、天正元年(1580)8月、竹の鋸で首を切られ処刑されたという。

〔千草街道〕: 四日市と近江日野を結ぶ街道。「甲津畑越え」「根の平越え」ともいう。鈴鹿峠より低く、東に行く近道として近江商人などが利用していた。千草側に、東海自然歩道の朝明溪谷入り口に、明治19年8月設置の「甲津畑越え」の石道標がある。

信楽焼/伊賀焼: 平安末期から鎌倉時代にかけて、陶器造りが行われ、瀬戸、常滑、越前、丹波、備前、信楽、の六陶産地を「日本六古窯」と呼ばれています。

信楽や伊賀は「古びわ湖層」の堆積物粘土を用いられ、薪も窯(穴窯)も同じものであるが、伊賀焼は高温の炎の加減や水分よる灰が自然釉ピロードとなって景色ができ、大名、茶人に好まれた。技術と偶然性による穴窯法のため高価に評価されていた。信長の伊賀焼き討ちなどで古伊賀焼は消滅した。

磯尾の南は伊賀の槇山で、古伊賀はここで焼かれていたという。

やがて信楽焼は瀬戸焼など磁器製品に圧倒され小物生産は衰退し、壺などの大物陶器の産地として今日に至る。

信楽焼の土は「黄瀬の土」であったが現在はあまり取れなく、他の土と混ぜている。

紫香楽宮建立のとき、帰化人から昨陶の技術が持ち込まれ須恵器を焼いたという。